

## 町並み保存・覚書

—名古屋「文化のみち」前史—

池田 誠一

## 【12】「保存」という政策…「文化都市」への道

## 1 保存政策の難しさ

ひとつの建物の除却申請に始まった白壁地区の町並み保存ですが、結果は、5か所の家屋保存・公開という予想外の成果を生むことになりました(図1)。

小さな地域で、近代建築の内部公開を5か所も行っているところは、全国でもあまり例がないのではないのでしょうか。それが実現できたのは、たまたま問題が起こったのが高度成長の反省期という時期に当たったからかもしれません。とはいえ全国の多くの地域が、

いまだ、「保存」か「開発」か、と揺れている中では大きな成果だったように思えます。

「保存」という政策が難しいのは、効率や効果が目標となる経済原則に真っ向から立ち向かうものだからです。そこにはやはり、それを乗り越える「哲学」が必要とされるのではないのでしょうか。今回は、町並み保存連載の最終回に当たって、その保存ということの意味を考えておきたいと思います。

## 2 保存と都市の文化

## (1) アンチ開発の政策

「保存」という政策は、あまりイメージのよいものではありません。対する「開発」政策には、夢や希望があるからです。これを保存するといっても、それだけのことで、それがなにを生み出すかも、多くの場合認識されることはありません。古いものを守るよりも、新しいものをつくることの方が、はるかに魅力がある



図1 白壁地区で保存・公開された5つの近代建築

からです。

しかし、一部の利は考えられます。それは、例えば環境政策です。建物を除却すれば、膨大なゴミが出ます。保存するということは、まさに立派な「リユース」の選択であると考えられます。あるいはそれは福祉政策でもあります。古いものを大切にすることは、まさに福祉政策の根源の思想です。「老人や病人はいらなくなった。経済性から捨ててしまおう！」と考える人はいません。やはりそれをどう大切に、活かしていくかという福祉政策そのものなのです。

このような目で見ると、「保存」という政策は決して後ろ向きの政策ではありません。また余分な政策でもないでしょう。もちろん視点の違いはありますが、開発政策と比べて劣っているものでもないはずです。ところがこれまでの時代は開発優先で、私たちが物事を経済効果や夢や希望で判断するという時代だったからです。

保存は時を経るごとにその効果が大きくなります。大切なことは、保存を長い期間で評価することです。10年後、いや100年後にどちらがいいかを考えて判断することがポイントではないでしょうか。

## (2) 「文化」のみち

白壁地区は、「文化のみち」の一翼を担うことになりました。一見すると、建物の保存と文化は結びつかないように思えます。名古屋城や徳川美術館は、明らかに近世の武家文化を伝えますが、白壁地区の建築はどんな文化を伝えるのでしょうか。

本連載の近代建築の紹介で重視したのは、施設の建設に至った背後の産業や人物です。例えば、なぜ豊田佐助邸がそこにあるのか、それはどういう意味を持つのかを問うと、そこに名古屋の近代の文化が浮かび上がってくるのです。

文化とは、芸術の分野だけではありません。産業や技術や人間が作り上げたもの。その結果が文化なのです。白壁地区は、紡織や陶磁器という、名古屋の近代を担ってきた産業がつくった文化が残ります。そして自動車産業ルーツも。それはまさに名古屋・近代の文化財といえるのではないのでしょうか。

## (3)文化都市

名古屋は「文化不毛の地」といわれることがあります。それは、芸術的なものが少ないというよりも、都市に「文化」を感じないからではないのでしょうか。

大変な震災に遭って多くの古いものが焼失しました。しかしすべてが失われたわけではありません。今日でも、戦前の多くの遺産が存在するのです。それを、「古くなったから」と言って壊してしまえば、そのものの持っていた文化は消えていくのです。都市の文化では、いかに古いものを大切に、活かしていくかを考えることが必要です。

文化都市とは、街の中に歴史や文化を感じる「時間軸」が存在する都市です。古いものがあり、新しいものもあって、その中に「時」が評価される都市といえるのではないのでしょうか。

それを達成するには、市民一人一人が、地域の歴史にこだわりを持つことが必要です。何が都市の文化をつくっているのかを理解することだといえます。その識見によって、その街が文化都市といわれるかどうかが決まるのではないのでしょうか。

保存という政策は、経済的負担を伴うものです。最近では、景観法(平成17年)や歴史まちづくり法(平成20年)等の制定によって、行政の関与がしやすくなりました。しかし、未だ現場では、経済の論理がまかり通ることが多いのが現状です。そこを成熟した市民の意見や支援によって、保存が検討される



図2 パンフレットに紹介されている「文化のみち」一帯。いろいろな施設が点在する(文献①)

都市ができたとき、名古屋は「文化都市」と呼べるものになるのではないのでしょうか。

### 3 紀行 文化のみち

#### …名古屋城から徳川園に…

最終回の紀行は、「文化のみち」の全区間を通して歩いてみましょう(図2)。ただその中で名古屋城と白壁地区だけは軽く通り過ぎることにします。

#### 〈名古屋城から〉

地下鉄の市役所駅の北改札を通り、突き当たり左の7番出口を出ます。この出入口は高麗門スタイルです。北と西には名古屋城の二の丸の堀が広がります。振り返ると、交差点の向こうに重要文化財になった名古屋市役所



重要文化財に指定された名古屋市役所(手前)、愛知県庁の各本庁舎が並ぶ

(本庁舎)と愛知県庁(本庁舎)が並びます。

交差点を渡ってそれらの建物の前を通り、県庁の南側の道を左折、庁内を通り抜けると、突き当たり右に名古屋市公館があります。その右側は旧陸軍将校用施設の跡を整備した三の丸公園です。庭園は、明治初期に廃止された名古屋城二の丸庭園が移されたといえます。



三の丸公園の入口。  
陸軍将校のための偕成社の庭園があった



赤レンガが町並みに映える旧控訴院の名古屋市政資料館。保存運動の魁だった

南に進み、三の丸の堀を渡って左に、堀に沿って進みます。次の角を左に曲がって北に進むと、右側に元名古屋市長の大喜多寅之助宅が県の議員会館として残ります。さらに進むとレンガ色が目立つ市政資料館です。

手前を右に曲がると主税町筋です。まっすぐ進むと国道(41号)で、渡ると町並み保存地区の白壁地区に入ります。左側に春田鉄次郎邸、豊田佐助邸を通り、次の信号では右側に二葉館を見て町並み保存地区を出ます。

信号を渡ると、少し向こうに、公園風の土地に長屋門が建っています。江戸時代から、しかも現地に残る貴重な建物です。さらに進むと、善光寺街道の屈曲部のすぐ向こうが国道(19号)です。



保存された長屋門。この位置にあったお屋敷の門。「当時から原位置」という貴重なもの

### 〈徳川園へ〉

国道を渡って左に、1本目を右に入ります。すぐ、この辺りの陶磁器産業の拠点だった陶磁器会館があります。

まっすぐ進み2本目の角を右に曲がります。向こう側は愛知商業高校の運動場になっています。南に進み、突き当りを左に曲がると道路に沿ったポケット空間があり、その中にその校地のいわれを書いた碑があります。ここは、尾張藩の藩校明倫堂の後を継いだ明倫中学(現・明和高校)があった所です。

信号を渡り東に進むと建中寺です。2代藩主徳川光友が父の菩提を弔うために建てました。当初は4万8千坪という大きな寺院でし



公園の中に残された建中寺の総門。  
ここは火事から守られた

た。土地の一部が3つの学校等になりましたが、それでも広大です。中には歴代の藩主が奉られています。道を右側に渡り、南に公園の中を進むと寺の総門があります。当初から残るのはこの門と、先ほどの所の三門です。

総門を出て少し先の道路が名古屋を東西に貫く商店街の通りです。左に曲がり商店街を進むと左に筒井小学校があります。明治5年設立とされ、正面に見える校舎は昭和11年建築、市内最古の鉄筋校舎です。



筒井小学校。正面は、市内で唯一残った戦前の鉄筋コンクリート校舎

すぐの交差点で左に曲がると、車道です。少し先の左には東海学園があります。進むと幹線道路に出ます。

道路を渡るとすぐ道なりに左、右と屈曲し、目的地の徳川園になります。このエリアは、尾張徳川家の大曾根屋敷の一部で、徳川美術館、蓬左文庫、徳川園(主に庭園)の三つの施設があります。美術館は尾張徳川家伝来の品々を、文庫は同じく伝来の文書等を保存



塀越しに臨む徳川美術館(旧館)。  
昭和初期の帝冠式の近代建築



整備された徳川美術館と右側は蓬左文庫。  
さらに左側には徳川園(庭園等)がある

展示時しており、庭園は当時の庭園を再現したものです。

帰路は先ほどの屈曲部まで戻り、そのまま東に進むと、塀越しに徳川美術館の旧館の建物が見えます。昭和10年に建てられた、こ

れも見逃せない建物です。道路を右に曲がると基幹バス停があります。

## 4 100年の後

文化とは長い時間をかけて出来上がるものです。白壁地区で保存を始めたときは、とにかく残そうとの思いだけでしたが、しばらく経つとこの仕事は100年単位の仕事であることに気が付きました。古いものを適切に保存していけば、価値はどんどん上がっていくからです。

白壁地区の100年後、22世紀はどうなっているのでしょうか。日本が大きく成長した20世紀。その遺跡はどれだけ残されるかわかりませんが、ここ白壁地区には、大正時代を中心にした街が残っていることでしょう。今後どれだけ保存されるかはわかりませんが、保存の機運の高まりもあり、10数軒の建物は残っているのではないのでしょうか。その頃は、今のマンションが耐用年数オーバーで、景観規制から懐かしい形で復元されているかもしれません。そんな時代を夢見つつこの連載を終わることにします。 <完>

<主な参考文献>

①案内パンフ「文化のみち」(2015、名古屋市)

### — 連載を終えて —

20年前に、私が係った白壁地区の近代建築の保存。その小さなキッカケは、その後多くの官・民の方々の努力で、今日、「文化のみち」と呼ばれる街が生まれることになりました。

ところが20年近く経つと当初の経緯は失われがちです。そこで、その成立までの過程を書き留めたくて、この連載を始めました。

手元に資料が少なく、十分とは云えないところがあるかもしれませんが。しかし保存活動のキッカケと試行錯誤の過程のおおよそは、ご理解いただけただのではないのでしょうか。

白壁地区の町並保存の試みは、前例のないことの連続でもありました。しかし、幸運と皆さんの努力で、大きく成長したことを喜びます。この連載を通して、その「保存という政策」の一つの姿を読み取っていただければ幸いです。

池田 誠一